

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart)

クラシック音楽の巨星であり、彼のオペラは音楽史において重要な位置を占めています。モーツァルトのオペラは、巧妙な音楽構造、深いキャラクター描写、そして高度なドラマ性で知られています。彼のオペラは、劇的な要素と音楽的な革新を組み合わせた作品が多く、広く愛されています。

モーツァルトの主なオペラ

《アルカディアの天使(Apollo et Hyacinthus)》

- **初演:** 1767 年
- **概要:** このオペラは、モーツァルトの初期の作品で、古代ギリシャの神話を基にしたストーリーです。アポロとヒアキントスの神話的な物語が描かれています。
- **音楽の特徴:** 若干の歌劇的な要素を持ちつつも、初期のモーツァルトのスタイルが色濃く反映されています。

《アルカディアの天使(Apollo et Hyacinthus)》は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが 11 歳のときに作曲したオペラで、彼の最初の舞台作品です。この作品は、ラテン語の台本を持つインテルメッツォ(幕間劇)として書かれました。

概要と背景

- **作曲:** 1767 年(モーツァルト 11 歳)
- **初演:** 1767 年、ザルツブルクの大学で初演されました。
- **台本:** クリスティアン・ヴィクトルス・ハルツィング(Christianus Victorinus Haltying)の台本に基づいています。
- **ジャンル:** インテルメッツォ(幕間劇)。オペラ・セリアに分類されることもあります。

あらすじ《アルカディアの天使》は、古代ギリシャの神話に基づいた物語で、主にアポロとヒアキントスの悲劇的なエピソードが描かれています。物語の中心となるキャラクターはアポロ、ヒアキントス、ゼフィルス(西風の神)です。

1. **アポロとヒアキントスの友情:** 太陽神アポロと人間の少年ヒアキントスは深い友情で結ばれていました。アポロはヒアキントスをとても愛しており、彼を教え導きます。
2. **ゼフィルスの嫉妬:** ゼフィルスもまたヒアキントスを愛しており、アポロとの親密さに嫉妬していました。ゼフィルスはヒアキントスのアポロへの愛を憎み、彼らの間に亀裂を生じさせようと企てます。
3. **悲劇的な結末:** ゼフィルスは、アポロがヒアキントスに投げた円盤(ディスク)がヒアキントスに当たるように風を操作し、事故が起こるように仕向けます。円盤はヒアキントスに致命的な傷を与え、彼は死んでしまいます。アポロはヒアキントスの死を嘆き、彼の血から美しい花を咲かせることで、その死を永遠に記憶に残そうとします。これが「ヒアシンス」という花の由来とされています。

音楽的特徴

- **若きモーツァルトの才能:** まだ11歳の若さながら、モーツァルトはすでに音楽的な才能を示しており、このオペラには彼の初期の作曲スタイルが見て取れます。メロディアスなアリア、感情豊かなレチタティーヴォ、そして美しい合唱曲が特徴です。
- **簡潔で感動的な構成:** モーツァルトの他の成熟したオペラに比べると、構造は比較的シンプルですが、その中に感情の深みとドラマティックな要素が込められています。
- **オーケストレーション:** モーツァルトは、オーケストラを巧みに用いて、登場人物の感情や物語の進行を音楽で描写しています。特に、アポロの威厳ある性格や、ヒアキントスの純粋さが音楽で表現されています。

歴史のおよび文化的背景

- **ザルツブルク大学の影響:** このオペラは、ザルツブルク大学での劇上演の一環として書かれました。大学の指導者たちは、教育的な目的でモーツァルトの才能を活用しようと考え、彼にこのインテルメッツォの作曲を依頼しました。
- **古典的テーマ:** ギリシャ神話に基づいたストーリーは、18世紀の文化的な好みを反映しており、当時の聴衆にも理解しやすいものでした。

結論

《アルカディアの天使 (Apollo et Hyacinthus)》は、モーツァルトの最初期の舞台作品でありながら、すでに彼の音楽的才能を垣間見ることができる重要なオペラです。彼の後の作品と比べるとシンプルですが、彼の作曲スタイルの発展を見る上で重要な位置を占めています。また、このオペラは若き天才がどのようにして成熟した音楽家へと成長していったのかを理解する手がかりともなります。

《イドメネオ (Idomeneo)》

- **初演:** 1781 年
- **概要:** クレタ島の王イドメネオが海神ポセイドンの呪いに苦しみ、息子と共に困難に立ち向かう物語。古代の神話に基づくドラマティックなストーリーです。
- **音楽の特徴:** モーツァルトのオペラにおける成熟したスタイルが見られ、複雑なアリアや合唱が特徴です。

《イドメネオ (Idomeneo)》は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが 1779 年から 1780 年にかけて作曲したオペラ・セリアです。モーツァルトのオペラの中でも特に評価が高く、バロック音楽と古典派音楽の橋渡しをする作品として重要な位置を占めています。

概要

- **作曲:** 1779 年 - 1780 年
- **初演:** 1781 年 1 月 29 日、ミュンヘンのケーニヒリヒェス・レジデンツ劇場 (Residenztheater)
- **台本:** ジャンニバティスタ・ヴァレスコ (Jean-Baptiste Varesco) によるイタリア語の台本。フランスの劇作家アントワーヌ・ダンクール (Antoine Danchet) の台本に基づいています。
- **ジャンル:** オペラ・セリア (深刻な内容のオペラ)

あらすじ

《イドメネオ》の物語は、トロイア戦争後のクレタ島を舞台に、クレタの王イドメネオと彼の息子イダマンテを中心に展開されます。古代ギリシャの神々と人間の関係が描かれたドラマティックなストーリーです。

1. 序幕

トロイア戦争から帰還するクレタ王イドメネオは、帰途の途中で嵐に遭遇します。彼は海神ネプチューン(ポセドン)に命乞いをし、無事に帰還できた暁には最初に出会った人を生贄に捧げることを誓います。

2. 第一幕

クレタ島では、イドメネオの息子イダマンテが戦争捕虜であるトロイアの王女イリアに恋心を抱いています。一方、アルゴスの王女エレットラもイダマンテを愛しており、イリアへの嫉妬が顕在化しています。イドメネオは無事に帰還しますが、最初に出会ったのが自分の息子イダマンテであったことに驚き、苦悩します。

3. 第二幕

イドメネオは誓いを守るべく、イダマンテをクレタから遠ざけようとしますが、嵐が再び襲い、ネプチューンの怒りが顕在化します。クレタ島は災難に見舞われ、人々は怯えています。イドメネオは、ネプチューンの怒りを鎮めるためにはイダマンテを生贄に捧げなければならないことを悟ります。

4. 第三幕

イドメネオは息子を救おうとする一方で、イリアは自らを犠牲にしようと決意します。ネプチューンの神殿での最終対決が近づきますが、神の音が響き、イダマンテが真の愛と忠誠を示したことで、ネプチューンはイドメネオに王位を譲り、イダマンテとイリアが結婚することを許します。エレットラは絶望し、怒りに満ちたアリアを歌いながら舞台を去ります。

音楽の特徴

- **バロックと古典派の融合:** 《イドメネオ》は、バロック音楽の影響を受けつつ、モーツァルトが古典派の様式を確立しつつある時期の作品です。華麗な装飾音や対位法が用いられながらも、感情豊かなアリアやオーケストレーションが見られます。

- **アリアとレチタティーヴォ:** モーツァルトは、アリアとレチタティーヴォのバランスを取り、物語の進行とキャラクターの感情を巧みに表現しています。特にイリアとエレットラのアリアは、それぞれのキャラクターの内面を深く表現しています。
- **合唱とオーケストラ:** 合唱の部分が非常に重要な役割を果たし、ドラマティックな効果を高めています。また、オーケストラの使用も巧妙で、特に嵐のシーンでは、音楽が劇的な緊張感を引き立てます。
- **ドラマティックなアリア:** イドメネオの「Fuor del mar(海の外では)」やエレットラの「D'Oreste, d'Aiace(オレスト、アジャクスの呪い)」など、劇的なアリアが多く、キャラクターの感情が強く表現されています。

演出と評価

- **新古典主義的要素:** このオペラは、モーツァルトの中で初めて新古典主義的要素を持つ作品とされています。古典的な神話のテーマを取り入れつつ、音楽的な革新を進めました。
- **評価:** 初演時には好評を博し、モーツァルトのキャリアにおいても重要な位置を占める作品となりました。特に、その音楽的な質の高さとドラマティックな構成は、モーツァルトの他のオペラ作品にも影響を与えています。

結論

《イドメネオ》は、モーツァルトのオペラの中でも重要な作品の一つであり、彼の成熟した音楽スタイルの始まりを示しています。バロックの伝統と古典派の革新を融合させ、深い感情と劇的な要素を持つこのオペラは、モーツァルトの才能を余すところなく表現しており、オペラ史においても重要な位置を占めています。

《フィガロの結婚(Le Nozze di Figaro)》

- **初演:** 1786年
- **概要:** ピエル・ボーマルシェの喜劇《フィガロの結婚》を基にしたオペラ。下層階級のフィガロが、彼の結婚式の日にかかるさまざまな騒動を描いた作品です。

- **音楽の特徴:** ウィットに富んだ音楽と精緻なキャラクター描写が特徴です。アリアやデュエットが豊富で、ドラマティックな要素とコメディが融合しています。

《フィガロの結婚(Le Nozze di Figaro)》は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが1786年に作曲した4幕からなるオペラ・ブッフア(喜劇オペラ)です。台本はロレンツォ・ダ・ポンテが執筆し、ピエール・ボーマルシェの戯曲《フィガロの結婚》に基づいています。このオペラは、ウィットに富んだ物語と革新的な音楽が特徴で、モーツァルトの最も有名で愛される作品の一つとされています。

概要

- **作曲:** 1785年 - 1786年
- **初演:** 1786年5月1日、ウィーンのブルク劇場
- **台本:** ロレンツォ・ダ・ポンテ
- **ジャンル:** オペラ・ブッフア(喜劇オペラ)

あらすじ

《フィガロの結婚》は、アルマヴィーヴァ伯爵の屋敷を舞台に、伯爵の召使フィガロとその婚約者スザンナを中心に繰り広げられるラブコメディです。物語は1日で進行し、愛、嫉妬、陰謀が交錯する複雑なプロットを持っています。

1. 第一幕

物語は、フィガロとスザンナが結婚の準備をしているところから始まります。アルマヴィーヴァ伯爵は、スザンナに対して「初夜権(droit du seigneur)」を復活させようと企んでおり、彼女に言い寄っています。一方、フィガロは伯爵の意図を察知し、彼の計画を阻止しようとします。

2. 第二幕

伯爵夫人ロジーナは、夫の浮気に心を痛めています。彼女はスザンナとフィガロの協力を得て、伯爵に一泡吹かせる計画を立てます。スザンナが伯爵に会う約束をし、代わりに小姓のケルビーノが女装して現れるという作戦です。ケルビーノは若く、恋に恋する少年で、伯爵夫人にも淡い思いを寄せています。

3. 第三幕

伯爵は、スザンナが自分の誘いに応じたと思い込みますが、フィガロが計画を知り、事態はさらに混乱します。伯爵はフィガロの出生に疑いを抱き、彼を侮辱します。そこへ、マルチェリーナとバルトロ博士が現れ、フィガロに金の返済を迫ります。フィガロは生まれてすぐに捨てられたという出生の秘密を語り、実はマルチェリーナがフィガロの母親、バルトロ博士が父親であることが判明します。これにより、フィガロの結婚の障害は取り除かれます。

4. 第四幕

夜の庭園で、伯爵夫人はスザンナと衣装を取り替え、伯爵を騙す計画を実行します。伯爵は変装した伯爵夫人をスザンナだと思い込み、口説きます。一方、スザンナに変装した伯爵夫人がフィガロと会い、計画通りにことが進みますが、フィガロはそれを知らずにスザンナを疑います。最終的に誤解が解け、伯爵の浮気が暴かれます。伯爵夫人は寛大に夫を許し、二人の仲は修復されます。フィガロとスザンナも無事に結ばれ、全員が幸せを祝います。

音楽の特徴

- **キャラクター描写:** モーツァルトの音楽は、各キャラクターの性格や感情を巧みに表現しています。例えば、伯爵夫人のアリア「恋とはどんなものかしら(Porgi, amor)」は、彼女の悲しみと孤独を繊細に描いています。一方、フィガロの「楽しい思い出はどこへ行った(Non più andrai)」は、軽快でユーモラスな雰囲気を持っています。
- **アンサンブルの巧みな使用:** このオペラでは、二重唱、三重唱、四重唱、さらに大規模なアンサンブルが効果的に使われ、キャラクター同士の関係や感情の絡み合いを音楽で描写しています。特に、第二幕のフィナーレは、オペラ全体のハイライトの一つとされ、複雑な感情が絡み合うシーンが精密に展開されます。
- **レチタティーヴォとアリアのバランス:** 物語の進行を担うレチタティーヴォと、キャラクターの内面を表現するアリアのバランスが巧妙で、ストーリーのテンポがよく保たれています。
- **オーケストラの役割:** モーツァルトはオーケストラを物語の展開を助けるために使用しており、感情の強調や場面の描写に重要な役割を果たしています。特に序

曲は、物語の喜劇的な要素を象徴し、エネルギッシュで明るいものとなっています。

文化的・歴史的背景

- **社会風刺:** 《フィガロの結婚》は、当時の貴族社会を風刺しており、特にアルマヴィーヴァ伯爵のような貴族の権力の乱用を批判しています。この点で、フランス革命前夜の社会的緊張感を反映しています。初演時には、その内容が政治的に挑発的と見なされ、ウィーンでの上演が一時禁止されるほどでした。
- **ロレンツォ・ダ・ポンテとの協力:** モーツァルトとダ・ポンテの協力は、このオペラの成功に大きく貢献しました。彼らは後に《ドン・ジョヴァンニ》や《コジ・ファン・トゥッテ》でも共同作業を行い、素晴らしい作品を生み出しました。

結論

《フィガロの結婚》は、モーツァルトのオペラ作品の中でも特に重要で、彼の天才的な音楽とドラマの融合を示しています。登場人物の感情や性格を巧みに描写する音楽、そして人間の本質や社会の問題を風刺するユーモアが詰まったこのオペラは、今もなお多くの観客に愛され続けています。オペラの歴史においても、その革新性と普遍的なテーマにより、不朽の名作とされています。

《ドン・ジョバンニ(Don Giovanni)》

- **初演:** 1787年
- **概要:** ドン・ジョバンニという放蕩者の物語で、彼の罪が最終的に報いを受けることを描いた作品です。シェイクスピアの《ドン・ファン》に触発された物語です。
- **音楽の特徴:** 複雑な音楽構造と、感情豊かなアリアが特徴です。コメディとトラジディが融合し、劇的な緊張感が持続します。

《ドン・ジョヴァンニ(Don Giovanni)》は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが1787年に作曲した2幕のオペラで、「ドラマ・ジョコーソ(dramma giocoso)」と呼ばれるジャンルに分類されます。台本はロレンツォ・ダ・ポンテが書き、放蕩息子ドン・ジョヴァンニの

物語を中心に、喜劇と悲劇が融合した深みのあるドラマが展開されます。モーツァルトのオペラの中でも特に人気が高く、現在でも頻繁に上演される作品です。

概要

- 作曲: 1787 年
- 初演: 1787 年 10 月 29 日、ブラハのノスタルジア劇場(現在のエステート劇場)
- 台本: ロレンツォ・ダ・ポンテ
- ジャンル: ドラマ・ジョコーソ(喜劇的要素を含む悲劇)

あらすじ

《ドン・ジョヴァンニ》は、スペインのセビリアを舞台に、主人公ドン・ジョヴァンニの数々の悪行とその結末を描いています。

第一幕

1. 騎士団長の殺害

物語は、ドン・ジョヴァンニが貴婦人ドンナ・アンナを誘惑しようとしているところから始まります。アンナの婚約者ドン・オッターヴィオとアンナの父である騎士団長が登場し、騎士団長はジョヴァンニと決闘になりますが、ジョヴァンニに殺されてしまいます。アンナとオッターヴィオは、復讐を誓います。

2. ドンナ・エルヴィーラとの再会

ジョヴァンニは次のターゲットを求めて町を彷徨います。そこで彼の過去の恋人であるドンナ・エルヴィーラに出会います。エルヴィーラはジョヴァンニに捨てられたことを恨み、彼に復讐を誓っています。しかし、ジョヴァンニはエルヴィーラの怒りを軽くあしらひ、その場を去ります。

3. ゼルリーナとマゼットの婚約祝い

ジョヴァンニは農民たちの婚約祝いに出くわし、美しい娘ゼルリーナに目をつけます。彼はゼルリーナを誘惑しようとしませんが、エルヴィーラが現れて彼の悪行を暴露します。さらに、アンナとオッターヴィオも到着し、ジョヴァンニが父を殺した男であることに気づきます。彼らはジョヴァンニの捕縛を計画します。

4. 宴会の準備

ジョヴァンニは召使レポレッコに宴会の準備を命じます。宴会では、ジョヴァンニがゼルリーナを再び誘惑しようとしませんが、マゼットと仲間たちが駆けつけ、ジョヴァンニは追い詰められます。しかし、彼は巧みに逃げ去ります。

第二幕

1. 変装と逃避

ジョヴァンニはレポレッコに変装をさせてエルヴィーラを引きつけ、その隙にエルヴィーラの侍女を誘惑しようとしませんが、計画は失敗し、彼らは逃げざるを得なくなります。レポレッコはエルヴィーラ、アンナ、オッターヴィオ、マゼット、ゼルリーナに捕まりますが、正体を明かして許しを乞います。

2. 墓地のシーン

ジョヴァンニとレポレッコは墓地で騎士団長の墓の前に立ちます。そこへ、騎士団長の石像が生き返り、ジョヴァンニに悔い改めるよう警告します。ジョヴァンニは嘲笑し、石像を夕食に招待します。石像は招待を受け入れ、消え去ります。

3. 最終対決

ジョヴァンニの館で、石像が登場し、ジョヴァンニに最後のチャンスを与えます。しかし、ジョヴァンニは頑なに悔い改めを拒否し、石像に連れ去られて地獄に落ちます。最後に登場人物たちは、ジョヴァンニの死を確認し、それぞれの未来を決意します。

音楽の特徴

- **オペラのジャンルを超えた革新:** 《ドン・ジョヴァンニ》は、喜劇的要素と悲劇的要素が巧みに融合した「ドラマ・ジョコーソ」として、モーツァルトの音楽的革新を象徴しています。笑いと涙が交錯する劇的な展開は、観客を引き込みます。
- **キャラクターの音楽的表現:** 各キャラクターには独自の音楽的テーマが与えられており、彼らの性格や感情が音楽を通じて明確に表現されています。例えば、ドン・ジョヴァンニの魅力的で誘惑的な性質は、軽快なメロディとリズムで表現されており、騎士団長の石像の登場シーンでは不気味で重厚な音楽が使用されています。

- **レチタティーヴォとアリアの巧妙な配置:** 物語の進行をスムーズにするため、レチタティーヴォ(セッコ・レチタティーヴォとアコンパニャートの両方)が巧妙に配置されています。また、アリアやアンサンブルもドラマの流れに合わせて効果的に使用されており、観客に強い印象を与えます。
- **オーケストラの豊かな表現:** モーツァルトはオーケストラを用いて登場人物の感情や場面の雰囲気や織細に表現しています。特に、序曲はオペラ全体の主題を予告し、ドン・ジョヴァンニの不穏な運命を暗示しています。

文化的・歴史的背景

- **啓蒙思想の影響:** 《ドン・ジョヴァンニ》は 18 世紀の啓蒙思想の影響を受けており、個人の自由と責任、道徳的な選択の重要性をテーマにしています。特に、ドン・ジョヴァンニの放蕩とその結果は、道徳的教訓としての要素を持ち、当時の社会における倫理観を反映しています。
- **ロレンツォ・ダ・ポンテとの協力:** ダ・ポンテはモーツァルトと共に《フィガロの結婚》や《コジ・ファン・トゥッテ》なども手掛けており、彼らのコラボレーションは 18 世紀オペラの革新に大きく寄与しました。

結論

《ドン・ジョヴァンニ》は、モーツァルトのオペラ作品の中でも特に深い心理描写と劇的な要素が融合した傑作です。放蕩者の破滅という普遍的なテーマを扱いながらも、人間の複雑な感情や道徳的葛藤を鋭く描き出しています。オペラ史においても重要な作品であり、現在でも多くの劇場で上演され、観客に愛され続けています。その音楽的な魅力と深いドラマ性は、モーツァルトの天才的な才能を余すところなく示しています。

《魔笛(Die Zauberflöte)》

- **初演:** 1791 年
- **概要:** 魔法の笛を持つタミーノが、さまざまな試練を乗り越えて愛と知恵を手に入れる物語。ファンタジーと神秘的な要素が組み合わさっています。

- **音楽の特徴:** 広範な音楽スタイルが含まれ、アリアや重唱が感情豊かです。特に「夜の女王のアリア」が有名です。

《魔笛(Die Zauberflöte)》**は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが1791年に作曲した2幕のオペラです。台本はエマヌエル・シカネーダーによって書かれ、彼もまた初演でのパパゲーノ役として出演しました。このオペラは「ジングシュピール(Singspiel)」という形式で、台詞と音楽が交互に現れるスタイルを持っています。《魔笛》は深遠な哲学的テーマと魅力的なファンタジー要素が織り交ぜられた作品であり、モーツァルトの最後のオペラ作品の一つです。

概要

- **作曲:** 1791年
- **初演:** 1791年9月30日、ウィーンのフライハウス劇場
- **台本:** エマヌエル・シカネーダー
- **ジャンル:** ジングシュピール(台詞入りのオペラ)

あらすじ

《魔笛》は架空のエジプトを舞台に、善と悪の戦い、愛と試練、啓蒙の力をテーマにした物語が展開されます。

第一幕

1. タミーノと三人の侍女

物語は、若い王子タミーノが巨大な蛇に追われているところから始まります。彼は倒れて気を失いますが、夜の女王の三人の侍女が現れ、蛇を退治します。目を覚ましたタミーノは、美しい娘の絵を見せられ、彼女が夜の女王の娘パミーナであることを知らされます。タミーノは彼女に恋をし、彼女を救い出すことを決意します。

2. 夜の女王の登場

夜の女王が現れ、タミーノにパミーナが悪の司祭ザラストロに囚われていると告げ、彼女を救い出してくれるよう頼みます。タミーノはこの使命を受け入れ、夜の女王から魔法の笛を授かります。笛は困難を乗り越える力を持っています。

3. パパゲーノの同行

鳥刺しのパパゲーノがタミーノの旅に同行することになります。彼もまた、夜の女王の命令で、パミーナを救い出すための旅に出発します。パパゲーノは鐘の音で敵を鎮めることができる魔法の鈴を与えられます。

4. パミーナとモノスタス

一方、ザラストロの神殿では、奴隷監督のモノスタスがパミーナに言い寄っています。パミーナは彼を恐れています。そこにパパゲーノが現れ、モノスタスを追い払います。パパゲーノとパミーナはタミーノに会うために逃げ出します。

5. タミーノの試練

タミーノはザラストロの神殿にたどり着きますが、彼が善人であり、夜の女王が実は悪の側であることを知ります。ザラストロはタミーノとパミーナを結婚させるために、タミーノに一連の試練を課します。

第二幕

1. 沈黙の試練

タミーノとパパゲーノは、試練のために沈黙を守らなければならないという課題を与えられます。パミーナがタミーノのもとを訪れますが、彼は沈黙を守るために彼女を無視しなければならず、彼女は絶望します。

2. 夜の女王の復讐のARIA

夜の女王はパミーナの前に現れ、ザラストロを殺すよう命じます。彼女のARIA「復讐の炎は地獄のように燃え(Der Hölle Rache kocht in meinem Herzen)」は、オペラ全体のハイライトの一つであり、その強烈な感情が表現されています。パミーナは母の命令に従うことを拒否し、混乱します。

3. 愛の力と最終試練

パミーナとタミーノはついに再会し、愛の力で試練を乗り越えることを誓います。二人は火と水の試練に直面しますが、魔法の笛の力を使って無事に乗り越えます。

4. パパゲーノの幸福

パパゲーノは試練に耐えられず、失敗しますが、最後には愛するパパゲーノと再会し、二人は結ばれます。彼らの再会の場面は、ユーモラスで愛らしいシーンとして親しまれています。

5. 夜の女王の敗北と勝利

夜の女王とその手下がザラストロの神殿を襲撃しようしますが、光の力によって打ち破られます。ザラストロは光の勝利を宣言し、タミーノとパミーナは啓蒙と愛の力によって結ばれ、オペラは喜びのうちに幕を閉じます。

音楽の特徴

- **アリアとアンサンブル:** 《魔笛》には、非常に有名なアリアが数多く含まれています。特に夜の女王のアリア「復讐の炎は地獄のように燃え」は、コロラトゥーラ・ソプラノの技術を駆使した超高音域が特徴で、聴衆に強烈な印象を与えます。また、タミーノのアリア「美しい音楽の力 (Dies Bildnis ist bezaubernd schön)」やババゲーノの「私は鳥刺し (Der Vogelfänger bin ich ja)」など、キャラクターの個性を表現する多彩な楽曲が魅力です。
- **合唱の重要性:** 合唱は物語の進行において重要な役割を果たしており、神殿の合唱や試練の合唱などがドラマの重要な転換点を演出します。これにより、物語に壮大さと神秘性が加わります。
- **オーケストレーション:** モーツァルトはオーケストラを巧みに用いて、登場人物の感情や場面の雰囲気豊かに描写しています。魔法の笛の音や魔法の鈴の音が物語にファンタジーの要素を加え、聴衆を幻想的な世界に引き込みます。

文化的・哲学的背景

- **フリーメイソンの影響:** モーツァルトとシカネーダーは共にフリーメイソンの会員であり、その教義が《魔笛》に大きな影響を与えています。ザラストロの神殿はフリーメイソンの理想を反映しており、啓蒙主義、光、理性、博愛といったテーマが織り込まれています。
- **善と悪の対立:** 《魔笛》は、善と悪、光と闇の対立を描いており、これらはフリーメイソンの思想を反映しています。夜の女王とザラストロの対立は、このテーマの象徴です。

結論

《魔笛》は、モーツァルトのオペラ作品の中でも最も人気が高く、深い哲学的テーマと幻想的な要素が見事に融合した傑作です。音楽的には美しいメロディー、ドラマティックなアリア、魅力的なアンサンブルが豊富で、観客を魅了し続けています。また、啓蒙主義とフリーメイソンの思想が色濃く反映されており、その象徴的なメッセージは今なお新鮮さを失いません。モーツァルトの死の直前に完成した

《コジ・ファン・トゥッテ(Così fan tutte)》

- **初演:** 1790 年
- **概要:** 友情と恋愛の試練を描いた喜劇。二人の軍人が自分の恋人たちを試すために策略を巡らせる物語です。
- **音楽の特徴:** ユーモアと皮肉を交えた音楽が特徴で、キャラクターの性格が音楽で巧みに表現されています。

《コジ・ファン・トゥッテ(Così fan tutte)》**は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが1790年に作曲した2幕のオペラです。タイトルはイタリア語で「女はみんなこうしたもの」という意味で、恋愛と信頼、嫉妬と試練をテーマにしたコメディです。台本はロレンツォ・ダ・ポンテによって書かれました。モーツァルトとダ・ポンテの三大オペラの一つであり、他の二つは《フィガロの結婚》と《ドン・ジョヴァンニ》です。

概要

- **作曲:** 1790 年
- **初演:** 1790 年 1 月 26 日、ウィーンのブルク劇場
- **台本:** ロレンツォ・ダ・ポンテ
- **ジャンル:** ドラマ・ジョコーソ(喜劇的要素を含む悲劇)

あらすじ

《コジ・ファン・トゥッテ》は、二組の恋人たちが登場し、友情と恋愛の試練を経て愛の真実を探る物語です。

第一幕

1. 賭けの発端

物語は、ナポリの若い将校フェルランドとグリエルモが、それぞれの婚約者フィオルディリージとドラベッラの貞節を称賛するところから始まります。彼らの友人である年長の哲学者ドン・アルフォンソは、女性の貞節を疑い、彼らに「すべての女はこうしたもの(così fan tutte)」と主張します。ドン・アルフォンソは、婚約者たちが本当に貞節かどうかを確かめるために賭けを持ちかけます。

2. 偽りの出発と変装

ドン・アルフォンソの計画に従い、フェルランドとグリエルモは軍隊に召集されたと偽り、フィオルディリージとドラベッラに別れを告げます。彼らが去った後、ドン・アルフォンソは召使のデスピーーナを巻き込み、計画を実行に移します。二人の将校はアルバニア人に変装し、フィオルディリージとドラベッラに接近します。

3. 偽りの求愛

アルバニア人に変装したフェルランドとグリエルモは、互いの婚約者を誘惑し始めます。フェルランドはドラベッラを、グリエルモはフィオルディリージをターゲットにします。当初、二人の女性は変装した男性たちの求愛を拒絶しますが、ドン・アルフォンソとデスピーーナの策略により、徐々に揺らぎ始めます。

4. 嘘の自殺未遂

フェルランドとグリエルモは、フィオルディリージとドラベッラの同情を引くために、自殺を図ったふりをします。デスピーーナが偽の医者として現れ、磁石を使った治療法で二人を「蘇生」させます。この一件で、女性たちの心はさらに揺れ動きます。

第二幕

1. 愛の混乱

ドラベッラはフェルランドの求愛に心を動かされ、ついに彼に心を許します。一方、フィオルディリージはグリエルモに対してまだ抵抗していますが、徐々に彼の魅力に惹かれていきます。女性たちは自分たちの感情の変化に困惑し、悩みます。

2. 婚約の提案

アルバニア人に変装したフェルランドとグリエルモは、ドラベッラとフィオルディリージに結婚を申し込みます。二人の女性は揺れ動く心を抱えながらも、結婚の提

案を受け入れることに決めます。デスピーナが偽の公証人として結婚契約書を作成します。

3. 真実の暴露

結婚式の準備が整ったところで、軍服を着た本来のフェルランドとグリエルモが戻ってきます。真実が明るみに出た瞬間、フィオルディリージとドラベッラはショックを受け、騙されたことに気づきます。しかし、ドン・アルフォンソが事態を収拾し、彼らに「すべては教訓」として寛大さを求めます。最終的に、二組のカップルは再び結ばれ、オペラは和解と笑いで幕を閉じます。

音楽の特徴

- **バランスの取れたアンサンブル:** 《コジ・ファン・トゥッテ》には、二重唱、三重唱、四重唱、五重唱、六重唱など、多様なアンサンブルが豊富に含まれています。これにより、登場人物たちの感情の絡み合いや対立が巧みに表現されています。
- **有名なアリア:** いくつかのアリアが非常に有名であり、たとえばフィオルディリージの「岩のように動かずに(Come scoglio)」や、フェルランドの「優しき魂よ(Un'aura amorosa)」などがあります。これらのアリアは、登場人物たちの感情や性格を深く表現しており、聴衆に強い印象を与えます。
- **軽快なレチタティーヴォ:** レチタティーヴォ部分もまた物語の進行において重要な役割を果たし、台詞が速いテンポで交わされることで、喜劇的なテンポ感を生み出しています。

文化的・哲学的背景

- **啓蒙思想の影響:** 《コジ・ファン・トゥッテ》は18世紀の啓蒙思想の影響を受けており、理性と感情、信仰と疑念といったテーマを扱っています。恋愛の試練を通じて、人間の本質や道徳的選択についての問いが提起されています。
- **女性の描写:** タイトルが示すように、女性の貞節や忠誠心に対する疑念がテーマとして取り上げられていますが、同時に作品は男女ともに弱さや揺らぎを持っていることを描いています。この点で、単純な女性蔑視の視点を超え、人間全体の複雑さを浮き彫りにしています。

結論

《コジ・ファン・トゥッテ》は、モーツァルトのオペラの中でも特に知的で洗練された作品の一つです。音楽的には軽快で美しく、ユーモアと人間ドラマが絶妙に調和しています。台本の巧妙さとモーツァルトの音楽的才能が結びついたこのオペラは、恋愛の本質や人間の複雑さを探る一方で、観客に楽しさと笑いを提供します。現代においても、多くの観客に愛され、頻繁に上演される作品です。